

豊かな草資源を 新しい開発方法で

大規模草地改良事業の成果と問題点

熊本県の大規模草地改良事業は、阿蘇郡の宮町、阿蘇町、産山村の三カ町村において昭和四十一年から四十五年を事業予定期間として実施されているが、現在草地造成千七百ヘクタールを基盤として約五千頭の乳用牛及び肉用牛を飼養している。そして年間約六億五千万円の粗収入をめざして、高原畜産として初めての試みである農家の協業体によって、現地で搾乳及び育成を行なおうとするものである。

ところで、この地域は、阿蘇山の北外輪山に分布する広大な原野（三カ町村で一万五千六百五十七ヘクタール……九州横断道路の両側一帯）であるが、古くから和牛、馬などの放牧及び冬期間の家畜

の飼料確保のための採草地として、入会権慣行により粗放的に利用され、耕種農業の従属的な姿で畜産經營がなされたものである。

しかし、最近の畜産物の需用増加に伴い、畜産振興の基盤として、また、わが国の食糧基地としての割役を果す上からもこの広大な原野の開発は時代の要請であると共に、転換期に来た地域農業の打開策として本事業が取り上げられたもので、国、県、町村一体となって事業の推進をはかることにしている。

◆事業計画の全貌

国営事業として草地造成を千七百ヘクタール。道路四万八千五百四十七メートル

ル。雑用水ポンプ十二カ所、給水槽八十八カ所。事業費計九万七千四百万円と合わせ、付帯事業としては牧柵電気導入、避難舎、看護舎、サイロ、牧野樹林など事業費計二億五千七百七十八万円を実施し、その他農業構造改善事業及び関連補助事業等の事業費五億千一百十三万円を合せ計十七億四千三百九十一万円を投入し、一大高原畜産を建設するという計画である。

すなわち、千七百ヘクタールの草地造成を基盤として道路、水その他家畜の飼養管理に必要な関連施設の建設により、乳用牛二千二百九十七頭、肉用牛二千七百二頭、約五千頭の家畜を草原で飼育する計画である。

これまでの実績をふりかえってみると事業の成果としては次のようなことが考えられる。

◆草地畜産の成果と今後の課題

◇これまでの阿蘇地方における牛の飼養方式は、和牛においてさえ夏山、冬里

方式を通念していたが、乳牛を含め現地での年間放牧方式による飼養体験から新しい経営進路がひらけた。

◇牧野における酪農經營については、ダニ熱の障害が甚だしく、成立を危ぶまれていたがある程度の犠牲はやむを得ないとして、遂に土地になれた牛を造成することにより可能性についての自信を得た。

◇入会慣行の原野を利用するため必然の課題である協業經營の適用により、閉鎖的經營から脱皮の糸口を得たことは、将来大規模圃場整備への進展との関連で意義は大きい。

は、現在のわが國の農業が選択的拡大の方向について迷路にさまよっているとき、本県においては恵まれた資源の上に立って開発方法や規模拡大の方向が確立されているという有利性は、あらためて深く認識されてよいことだろう。

もちろんこれだけの事業を推進するためには実際的には幾多の問題がある。事業の仕組み、ダニ熱を中心とした家畜衛生関係、資金の調達、草地維持管理技術協業經營の運営、畜産物価格安定などの諸問題を抱えている。

この中には早急に解決できるものもあるれば、長期に渡り努力をするものもある。いずれにしても何等かの対応措置が考えられるべきもので、要是經營する人達の意識が根本的なものと思われる。先進酪農地で、個人經營が規模拡大に伴う行詰まりを部分的に協業に持ち込んで解決をはかっている事例を思えば、当初から平等の条件で協業に進んだ利点は大きい。



一 雄大な阿蘇草原で放牧される牛の群（一の宮町の北山牧場）

◇草地畜産を一つの例として実証した功績は高く評価されるべきで、阿蘇、九重、飯田地域高原開発構想の道しるべともなっている。

（畜産課）

◆将来への明るい見通し

この事業主体は前記三カ町村だが、実際に家畜を飼養管理するのは牧野入会権者からなる協業体である。すなわち阿蘇町五団地（十一協業体）、一の宮四団地（七協業体）、産山村四団地（六協業体）

であり、この中四十三年度末までに八団地（九協業体）について七百四十一ヘクタールの草地造成と、これに付随する諸施設を整備し、肉用牛七百四十二頭、乳用牛六百六十五頭を飼養している。これ

ら、九協業体の現在の經營内容は協業組織の規模、構成員の意識の度合、家畜の取り入れ方などにより早期に着工してしまった所では四十四年度においてかなりの収入をあげており、将来への見通しは非常に明るい。